

軽部征夫

Interviewer

進研アドBetween編集長
長田雅子

社会の変化に 人材の基礎を 教養教育を 充実させる

東京工科大学は開学から現在まで、時代の変化を読み取った改革を次々と推進してきた。就任5年目を迎えた軽部征夫学長は「実学主義」を掲げ、さまざまな試みや挑戦を続けている。育

人間の本質を学ぶ 「実学主義」

長田 貴学は学部の新設や改組をはじめ、さまざまな変革を推進してこられました。これまでの改革の歩みをお聞かせください。

軽部学長(以下軽部) 本学の設置法人である片柳学園は60余年の歴史があり、専門学校として当初はテレビやコンピューターの技術者を養成してきました。東京工科大学が開学したのは1986年です。技術の進歩を担ってきた専門学校の実績をもとに、工学部3学科からなる工学系大学としてスタートしました。

以来、日本初のメディア学部開設に続き、2003年に工学部を改組して2つの学部を設置しました。世界的な研究ブームが起こっていたバイオテクノロジーに着目してバイオニクス学部を開設。同時にコンピュータサイエンス学部も開設しました。バイオニクス学部はその後、応用生物学部名称変更しています。2010年にはデザイン学部と医療保健学部を新設して、現在は5学部と大学院1研究科を擁する大学となりました。

長田 貴学が教育の根幹とする「実学主義」と理念、ミッションとの関係について教えてください。

軽部 私は2008年に第4代学長に就任しましたが、副学長のころから建学の精神とそれまでの歩みをふまえて、理念やミッションをきちんと明文化する必要がありますを感じていました。

そこで、実社会で役立つ専門性に加え、豊かな人間性と適応力を備え、時代の最先端で活躍できる人材の育成をめざして「実学主義」という言葉を掲げ

たのです。「主義」としたのは、技術だけでなく、人間性も育てほしいからです。技術が進歩しても、それを使うのは人間。人間の本質を学んでほしいと思っています。

開学以来の歴史や学内の考え方などを明文化し、「生活の質の向上と文化の発展に貢献する人材を育成する」という基本理念を策定しました。さらに3つの具体的理念とミッションも決めました。学生の個性を重視し、先端的な環境でICT教育と外国語教育を実践することを謳い、「Only one, Best care」という教職員の行動規範をつくって実践しています。

丁寧な合意形成を経て 教養学環を設置

長田 どのような人材を育成したいとお考えですか。

軽部 私は21世紀のこれからを生きる日本人には3つの要素が必要だと考えています。

まず、「国際的な教養」です。グローバル化が進む中、国と国の垣根がどんどん低くなっています。就職してすぐに海外に赴任することもあり得ます。今後は、どの国でも通用する国際的な教養を高めることが不可欠でしょう。

次は「物事を批判的に見る能力」です。現代社会には深刻な問題が山積みになっていますが、批判的なもの見方ができなければ、そもそも問題を発見することができないでしょう。解決の糸口を見いだすには、まず批判的な見方を習慣づける必要があります。

最後は「創造力」です。日本の産業が世界の競争の中で生き残っていくには、今こそ技術者の創造力が求められ

ているのではないかと思います。

長田 これら3つの要素を修得させるために取り入れていらっしゃる具体的な教育方法をお聞かせください。

軽部 本学のめざす人材育成の基盤となる教養教育を担う新しい教員組織として、2012年度から「教養学環」を設置しました。これからの日本で必要とされ、社会で活躍できる力を磨くには、まずしっかりと教養を身に付けなければなりません。教養学環では、学部、学科、コースの別なく、人文・社会・外国語・数理・自然科学・社会人基礎科目などを体系的に教えます。また、学部間共通の専門基礎教育も行います。本学の学生に必ず身に付けてほしい教養科目や基礎科目を厳選し、これを「東京工科大学教養スタンダード」として、学部横断教育を行うようにしたのです。

教養学環の専任教員は24人います。専任教員には教養教育に専念してもらい、学生には社会の変化に柔軟に対応できる普遍的な能力を徹底的に修得させるのが、設置のねらいです。

長田 教養学環の設置はかなり大きな組織改革であったと思われます。学内ではどのような方法で合意形成を進められたのでしょうか。

軽部 私は改革を行う場合、何段階にも分けて教職員とじっくり話し合います。学長補佐の委員会、学部長懇談会、評議会、若手の助教や講師との懇談会、全学教職委員会といった場で、丁寧に説明をし、理解を得るようにしています。

学長が1人で旗を振っても、教職員の協力がなければ、大学教育の改善は実現できません。普段の授業でのアクティブラーニングや、ボランティア活



かるべいさお 1942年生まれ。東京工業大学大学院理工学研究科化学工学専攻博士課程修了。同大学資源化学研究所教授、東京大学先端科学技術研究センター教授、同大学国際産学共同研究センター長などを経て、東京工科大学バイオニクス学部学部長、同大学副学長を歴任し、2008年から現職。専門はバイオテクノロジー、バイオセンサー。

動を通したサービラーニングなどの新しい教育手法も取り入れていこうとしています。こうした改革を行う際も時間をかけて話し、教員や職員に浸透するように努めてきました。

教員の意識改革が 教育の成果を高める

長田 近年は教育の成果が重要視されていますが、その可視化の仕方について、お考えを聞かせてください。

軽部 教育成果の測定は難しい課題です。成果ではありませんが、まずは入学時点での学力、学生の質を高める努力が必要だと考えています。

教育の成果としてわかりやすいのは就職率でしょう。教育改革の結果として、就職率を向上させることに力を注いでいます。そのために、どのような教育を行えばどう育つかという関係を調査している最中です。さまざまな学内データを収集し、就職率を高めたいと考えています。

さらに教育の成果を向上させるには、教員の意識改革が必要です。例えば、成績は判定次第で留年や退学につ

ながり、学生の人生を左右することがあります。ところが、教員によって成績判定の基準はさまざまであり、基準がノーマライズ(正規化)されていないのです。

これから大学間の競争は、ますます激化していきます。全教員が理念を共有し、共通の基準で学生を指導していかなければ、大学としての教育力の強化にはつながりません。大学内で教育の基準がきちんとノーマライズされ、方向性が共有できれば、成果は必ず上がるはずで

長田 開学から26年になりますが、貴学の強みは何だと思われますか。

軽部 それは発信力です。教育・研究の成果を社会に還元したいという思いから、情報発信には他大学よりも力を入れていると自負しています。改革を次々と行っているのも、発信する材料は豊富にあります。

そして最大の強みは進化する力です。新しい大学ですから、伝統や歴史はありませんが、新たな試みにチャレンジできる柔軟な態勢があります。常に進化し、それを効果的に発信するのが本学の特徴といえるでしょう。